

マススクリーニングで発見された 171 例の集計

— 特に、予後について —

(分担研究：マススクリーニング施行中に新しく派生した諸問題の検討)

沢田 淳¹⁾ 角田昭夫²⁾

要約：昭和 61 年度までに神経芽細胞腫 (NB) マススクリーニング (MS) で発見され、登録・確認できた 171 例の分析を予後を中心に観察した。171 例のうち、生存例は 166 例 (97%) で大変良い結果がえられた。これは早期発見の結果であるが、発見時、原発腫瘍小さく全摘出できるためであったが、周囲への浸潤や局所、遠隔に転移のある例が多く見られたことは注目すべきである。MS が NB の予後改善に大きく貢献していることは明らかであった。全国でのこれまでの発見頻度は 1/14,000・6 か月乳児であったが、昭和 63 年 4 月からの HPLC 法の導入の推進により高頻度に発見されると予想される。

見出し語：スクリーニング、予後、転移部位。

研究方法：昭和 61 年度までに MS により発見された 171 例について、登録用紙による調査を行い、予後に関する所見の分析をした。

結果：発見例数、病期分類は協同研究者の角田昭夫氏の報告と重複するので省略する。

1. 3 例 (2%) に発熱、発汗、体重増加不良などの症状があったのみで、診察で腫瘍を触れたのは、腹部 NB 157 例のうち 89 例 (57%) のみであった。縦隔部 NB 14 例では全例無症状・無所見であった。

2. 原発腫瘍の摘出時の重さは 3.0~375g で、50g 以下が 87 例 (51%) であった。200g 以上は 6 例のみであった。しかし、原発臓器・被膜内のものは 103 例 (59%) で、64 例 (37%) では片側・両側に進展があった。

3. 転移は 94 例 (55%) にあった。リンパ節が最も多く 80 例にあり、局所両側 (20 例)、遠隔部位 (7 例) にもあり、そのほか、骨髄に 25 例 (疑い 5, 明瞭 20)、肝に 25 例、骨 2 例、認められた。

4. 治療はこれまでの治療方法と変わって

ないが、強力でない治療が選択されてることが多い。156例(93%)が初回に腫瘍の全摘が行われ、残りは部分あるいは二次的に全摘されている。化学療法はI期の3例を除き行なわれた。放射線療法は30例(18%)に行われた。

5. 予後は97%(166例)が生存、4例死亡、1例治療の拒否のため追跡不能であった。

考察：MSで発見された例の予後は極めて良いことが明瞭になった。その理由の最も大きいものは早期に発見されたため、すなわち、6か月にMSが実施していることによる。驚異的に高い治癒率である。しかし、多くの例で発見時の原発腫瘍は小さいのに、被膜を越えて進展していることや局所以外にも転移がみ

られ、進展しつつあることが示されている。この様に予後を不良にする要因があり、MS発見例が100%治癒するものでないことを表示している。そのため、スクリーニングの6か月での受検を忘れさせないような啓蒙が必要である。

文献

1. 角田昭夫：日本小児がん神経芽腫委員会報告：神経芽腫マスキングの全国集計結果。第4回日本小児がん研究会。63年10月14日 札幌市。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:昭和 61 年度までに神経芽細胞腫(NB)マススクリーニング(MS)で発見され,登録・確認できた 171 例の分析を予後を中心に観察した。171 例のうち,生存例は 166 例(97%)で大変良い結果がえられた。これは早期発見の結果であるが,発見時,原発腫瘍小さく全摘出できるためであったが,周囲への浸潤や局所,遠隔に転移のある例が多く見られたことは注目すべきである。MS が NB の予後改善に大きく貢献していることは明らかであった。全国でのこれまでの発見頻度は 1/14,000・6 か月乳児であったが,昭和 63 年 4 月からの HPLC 法の導入の推進により高頻度に発見されると予想される。